

# 令和元年 はごろも『夢』講演会

令和元年 11月 11日

講演会タイトル	「体育科における学びの深まりの実像とその手立て」
講師名	白旗 和也 氏(日本体育大学 教授 前国立教育政策研究所 教科調査官)

予測不可能な時代を生きていく子供たちに体育科の学習として、どのような資質・能力を身に付けさせればよいか。来年度から新学習指導要領が実施される。本講演では、その趣旨を再確認するとともに、教師の手立てを教えていただいた。

新学習指導要領の最終的な目標は、人格を完成させるために生きる力を育むことである。「何ができるようになるか」そのために「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」という学びの過程が重視され、一層、子供主体の学びを大切にする教育が推進される。体育科として「何を」「どのように」学ぶことで資質・能力を育成するか。

なぜこのような課題解決学習が必須になったのか。それには日本のGDPが大きく影響している。現在のGDPの順位は、1位アメリカ、2位中国、3位日本である。2位の中国は2009年に日本を追い抜いてからも上昇し続けている一方で、日本は毎年下降している。近い将来、4位のドイツをはじめとした下位の国々に抜かされていくだろう。だからといって日本人が働いていないわけではない。日本人の1日あたりの労働時間は世界で最も長い。それにも関わらず、国民一人当たりのGDPは25位、GDP成長率は145位である。つまり、日本は生産性が極めて低いのだ。今後の少子高齢社会では、一人一人が自立しなければ日本は衰退の一途をたどってしまうだろう。現在の小中学生は過渡期にいる。彼らは2050年ごろに日本社会を支える存在になる。少ない労働力で生産性を上げるためにも、課題解決学習は必須なのである。

体育科における深い学びとは、自他の運動についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、よりよく解決する学びの過程のことを指す。子供たちにこのような経験をさせることが大切だ。そのために、教師はより深い思考ができる発問をしたり、個に応じた場の工夫や情報を提供したりする等の手立てが必要だと考えられる。

深い学びが実現するためには、いくつかの段階があるが、特に「特性を大切にしたい運動との出会い方」が重要だ。まずは、動きそのもののおもしろさと運動することの楽しさを感じる。そこで「自分もできそう、これならできる」と子供が思えたら学習への意欲に繋がっていく。その中で教師が、「子供が解決したいと思う課題」を設定することで、子供にとっての必要感が生まれる。その後、必要感のある練習につながり、自分たちで解決できた喜びが次の学習の意欲へとつながっていく。小学生の体育科の授業では、どうしても勝敗を競い合う楽しさが主になりがちであるが、勝敗を越えた学びの価値付けをしていくことも教師の手立てとして必須である。

教師の言葉掛けも子供たちの主体的・対話的で深い学びに影響を及ぼす。単元学習で授業を進めていくと、単元に対する教師自身の学びも深まっていく。そうすると、教師の声掛けの質も変化し、具体的な発問が増える。より、チームや個人の様子に応じた具体的な声掛けができるようになる。重要なのは、声掛けの量や



質だけではない。声掛けを行うタイミングも重要なのだ。そのためには、子供の学習カードから情報収集する。

学習カードでの記述が思考・判断・表現の評価に直結するとは限らない。学習カードは、課題解決学習の支援や、個別支援の情報収集をする役割も担っている。学習カードをどのように作成し、そこからどのように見取り、どのようなコメントを返すか。そこに記述された友達のよい動きをどのように広めるかが大切なのだ。

教師の役割は子供たちの可能性を引き出し、よりよく生きていくために3つの資質・能力を育てていくことだ。今後も研究を重ねて、体育科の授業に臨みたい。